

## 2013年8月18日 毎日新聞「今週の本棚」欄では

### 終わりになき悲しみ

金田茉莉著、浅見洋子監修（コールサック社・1575円）

第二次世界大戦末期の1945年3月10日、米軍の戦略爆撃機による東京大空襲でおよそ10万人が殺された。歴史の教科書に書かれており、アカデミズムにおける研究、メディアによる報道の蓄積も分厚く、よく知られている悲劇である。

だが、その空襲で両親ら保護者を失った子供たちが戦後、どのように生きてきたのかについては、さほど知られていないだろう。本書は大空襲で家族3人を奪われ、9歳で孤児となった著者が、同様の体験をした人たちの証言を集め、被害の実態を記録した。

戦争による孤児は、12万人以上に及んだ。親戚などに引き取られたものの、慢性的な食糧難から満足に食べ物ももらえなかったり、「家畜のように働かされ」た子どもも多かったという。引き取り手がない子どもは地下道などで暮らし、食べ物は物乞いをするか、盗んででも手に入れた。餓死も珍しくなかった。戦争が終わっても、悲劇は続いていた。

著者は、一昨年3月11日の東日本大震災で両親ら保護者を失った子供たちの姿が、孤児の自分に重なるといふ。悲劇の再生産を食い止めることは、国民と国の役目だ。（栗）

と紹介されています。